



「カトリコス、図書館、大学の関係」

ハンス ユーゲン・マルクス

南山大学は参加校300を越す国際カトリック大学連盟に加盟しており、本通信につけられた「カトリコス」という名称もこうした帰属意識を反映していると思われる。そこで、今回はカトリコス、図書館、大学の三者の関わりについて述べてみる。

ギリシャ語の「カトリコス(カトリック)」は「普遍的」という意味だが、「オイクメニコス(エキュメニカル)」と同様、そもそもローマ帝国の権威の及ぶ範囲をさすものであり、平均的帝国住民にとって、それはまさに全世界を意味していた。そのローマ帝国内最大の図書館はエジプトのアレクサンドリアにあった。アレクサンドリアの図書館は紀元前48年に最初の火災に見舞われたが、それ以前の書物の総数は90万にも及んだというから驚きである。もちろん、図書館に従事する関係者や学者などの知識階級は帝国の国境で世界が終わっていると考えていたはずはない。実際、そこにはブラフマや仏教の文献も収められていた。また、キリスト教が元来の特殊性から脱皮し、当時の世界に通用する普遍性を身にまとったのも、このアレクサンドリアにおいてであったし、自己の伝承を批判的に再吟味すべく神学もここで生まれた。要するに、その地の広大な図書館はアレクサンドリア人に、自己の特殊性を越えて、真の普遍性を探求する姿勢を帯びさせたのである。

642年にエジプトがアラブ軍によって征服された時、アレクサンドリアの図書館も全焼してしまった。欧州では、すでに西方ローマ帝国は1世紀半も前に消滅し、8世紀まで民族移動や権力争いが絶え間なく起きていた。このように荒廃した欧州において、各地の修道院は国際知識人が自由にかつ安全に交際ができた、ほとんど唯一の場であった。そして各修道院の最高の宝は、各々の図書館であった。映画にもなった『薔薇の名前』という小説で、ウンベルト・エーコはこうした時代の修道者が抱く図書への愛着を印象的に描いている。しかし特に映画では修道者の振る舞いが奇妙に描写され、ただ受け身に写本を読んだり、盲目的に書き写したりしているような印象を受けた。たしかに写本の書写は大変重要な仕事であったし、古代ギリシャ・ローマの文献が現在私たちに伝わっているのもその成果である。ところが、プラトンなどの作品については、ある箇所が、間違いあるいは意図的な訂正によって、異なる形で記された多数の写本があった。それゆえ、新しい写本を作成する際、異読を行間や欄外に書き込むことが慣行となり、各異読の由来や価値について自己の見解を書き加える修道者も現われた。このように、多くの修道者は写本をただコピーしたのではなく、写本の一つ一つの箇所について信憑性を判断し、その判断の根拠を書き残したり、修道院付属学校でこうした研究成果を学生に分かち合った。後に、いくつもの修道院付属学校が、大学の設置母体になったことは決して偶然であったとは言えない。また、「カトリック」という点においては、中世の大学が教皇の認可を必要としたという意味だけでなく、アレクサンドリアから修道者に受け継がれた姿勢、すなわち、自己の特殊性を越えて、真に普遍的なものを探求するという姿勢を具現する場という意味でも「カトリック」であったと言える。

(Hans Jürgen MARX: 文学部教授, 南山大学長)

聖書和訳の歴史

大塚利恵子

今回はモリソン以降どのように聖書和訳が引き継がれていったかギュツラフ、ウィリアムズについて追ってみようと思います。

Gützlaff, Karl Friedrich August 郭実獵 (1803-1851) ペンネーム 愛漢者, 善徳

ドイツのプロテスタント中国宣教師。北ドイツのボンメルにて織物製造人の子として生まれる。一人息子で母を3才の時亡くしモラビア派の敬虔な父によって育てられた。18才の時、プロシア王フリードリッヒ・ヴィルヘルム三世に献じた詩が認められ、1820年選ばれてハレ(Halle)の学校に学び、1821年著名な神学者イエニッケの設立した宣教師養成の神学校に転じ、神学及び医学を修めた。

写真省略

1824年、外国伝道を志していたギュツラフはロンドンにて中国伝道の聖徒モリソンに邂逅、東洋布教に召命を覚える。

1827年、念願の東洋布教のため、オランダ伝道協会宣教師としてバタビヤにおもむき、同地で後続宣教師のためアジア各国語を研究していたメドハーストの家に寄宿、そこで中国語、マライ語を学んだ。

その頃メドハーストは、オランダ東インド商会から日本語の文献を借りて漢字をたよりに日本語を研究、1830年『英和和英字彙』を出版。これは、最初の英和辞典であった。

中国服を着たギュツラフ
「中国航海記」(1834年刊)所掲

ギュツラフは、メドハーストに刺激され、日本伝道を志すに至っただけでなく、この辞書を座右の書として聖書を和訳し、1832年(天保3)、琉球に来航、初めて日本人と語った。

1834年モリソン亡きあと、1835年、ギュツラフは英国商務庁の主席通訳官となりマカオに滞在。そこで尾張小野浦の漁民(音吉、久吉、岩吉)¹⁾を引き受ける。彼らは1832年秋、千石船宝順丸に乗って江戸へ向かう途中遭難、太平洋を漂流し、1834年北米に漂着、捕えられていたのをハドソン湾会社支配人に助けられ、翌年ロンドンを経てマカオに来たのをギュツラフが保護した。以来彼らを引き取り、教を説くとともに彼らを教師として日本語を学び、1837年(天保8)『約翰福音之伝』『約翰上中下書』をシンガポール堅夏書院にて木版刷で出版。これが最初の和訳聖書である。

「本書の訳はきわめて素朴というより不完全なもので、一読しては意味不明のものも少なくないが、参考文献としては『神天聖書』とメドハーストの不完全な字彙しかなく、(中略)尾張漂流民しかも漂流時に最年長者岩吉が二十八歳で他は十五、六歳の少年にすぎず、その語彙・表現力、そしてなによりも宗教思想用語の貧困な無学の漁民を日本語教師とせねばならなかったハンディキャップを思い、(中略)訳業にあたって彼が払った苦心と熱意とが並々ならぬものであったことが察せられる。」(海老澤有道著『日本の聖書』p110)

今日、世界に存在しているもので確認されているものは、『約翰福音之伝』16冊、『約翰上中下書』2冊。前書のうち日本国内の蔵本は7冊で、東京神学大学、同志社大学、明治学院大学、天理図書館、日本聖書協会(2冊)、故古橋智信博士(現在不明。京都外国語大学所蔵か?)に所蔵されている。後書は日本にはない。

同じく1837年、肥後船の日本漂流民、庄蔵、寿三郎、熊太郎、力松がマカオに送られた。彼らは1835年11月天草を出帆、長崎へ向かう途中遭難し、1836年1月ルソン島に漂着、捕えられていたのを、スペイン官憲に救われ、オリファント商会の好意によりマカオに送られ、この4名もギュツラフの家に寄宿。

1837年7月ギュツラフはこの7名の漂流民を日本に送還し、日本伝道の糸口をつかもうとオリファント商会のモリソン号に乗り込むが、浦賀港で激しい砲撃を受け、むなしくマカオに寄港。このモリソン号には、S.W.ウィリアムズも博物学者として同乗していた。

1839年アヘン戦争以降、ギュツラフは外交上の顧問及び通訳官などに就任して活動したが、この間伝道事業の発展をはかり、1844年中国人伝道者の養成を主眼とした「漢会」(Chinese Union)を設立した。その後、欧州全土にわたり中国伝道熱を鼓吹したギュツラフは、欧州より帰ってまもなく、48歳にして1851年8月9日香港にて世を去った。

Williams, Samuel Wells 衛三畏 (1812-1884)

アメリカのプロテスタント中国宣教師。ニューヨーク州ユティカ生まれ。篤信の母に育てられ、1833年アメリカン・ボード宣教師として広東に到着。ミッション印刷局の責任者として活動したが、禁教のため迫害を受け、1835年マカオに移住。そこでギュツラフと親交を結び、彼の家に預けられていた日本漂流民とも知り合った。ウィリアムズは漂流民たちを日本に送還する名のもとに日本宣教や通商のためモリソン号にて浦賀を目指したが幕府の打払令により上陸できなかった。

寄港後日本漂流民ら5名をしばらくの間引き取った後、天草漂流民の庄蔵ら3名を印刷所で働かせ、彼らから日本語を学び聖書の和訳を行い、でき上がったのが『馬太福音伝』である。

この訳稿写本は、1859年日本開国とともにS.R.ブラウンが日本へ来航する途中香港でウィリアムズと再会した折、日本における聖書と和訳の参考のためにと託されたものだが、1867年ブラウン宅の失火で焼失してしまう。また、ウィリアムズ稿本も1856年マカオの印刷所火災で失われ、1850年の庄蔵写本が翻訳当初のものではないが唯一残されているものである。また1841年までに『創世記』を和訳していたらしいが、その稿本は伝えられていない。

ウィリアムズはその後、避暑のため長崎にわたりサイル(E.W.Syle)やウッド(H.Wood)と連名で米国の三ミッション本部宛に、日本に宣教師を派遣するよう要求し、これが日本宣教の導火線となるなど東洋宣教史上に画期的な役割を演じた。1876年には、エール大学で東洋近代史、中国語教授となり、晩年は米国聖書協会の会長となって、1884年72歳で没した。

こうしてギュツラフが志した日本伝道及び聖書と和訳は、ウィリアムズへと引き継がれ、この後ブラウン、ヘボンらによって幕末の横浜を拠点に広められていった。

(Rieko OTSUKA:図書館事務課)

1) 岩吉、久吉、音吉の故郷は愛知県の知多半島美浜町小野浦で、菩提寺良参寺(美浜町大字小野浦字清水)に墓所も現存している。また日本聖書協会が最古の和訳聖書に貢献した3人を記念し、美浜町字福島に記念碑を建てた。

参考文献

海老澤有道著『日本の聖書』(講談社学術文庫)

高谷道男, 秋山憲兄解説「ギュツラフ訳『約翰福音之伝・約翰上中下書』覆刻版別冊」(新教出版社)

『日本聖書協会100年史』(日本聖書協会)

門脇清, 大柴恒著『門脇文庫日本語聖書翻訳史』(新教出版社)

海老澤有道著『CLASSICA JAPONICA第10次 ヴァリア篇 解説』

『キリスト教人名辞典』(日本基督教団出版局)

『カトリック文庫』利用について

現在『カトリック文庫』は、未整理資料が多く（約 6,500 点）所蔵目録が完成していないことや、カトリック文庫資料室の整備の遅れなどの理由で、暫定的な規程により利用していただいております。利用者の方々には暫く不便をおかけしますがご容赦ください。

利用対象者：研究目的が明確な研究者に限ります。所属機関発行の資料利用依頼書を持参の上、来館してください。

利用対象資料：原則としてすべての資料。ただし、保存状態によっては制限する場合があります。現在は、未整理資料の一部閲覧できないものがあります。

利用可能時間：月～金曜日：9:30～16:30、土曜日：9:30～11:30

閲覧サービス：整理済の資料については、貴重室に仮置きしていますので、図書館内のコンピュータ目録(GEMMA-)で検索し、出納してください。指定された場所で閲覧できます。また、未整理資料の一部はカトリック文庫資料室内で閲覧できます。資料の複写・貸出については、原則としてできません。

参考サービス：学外からの所蔵調査、文献複写、相互貸借は受け付けておりません。

カトリック文庫新委員紹介

委員：牧野多完子（閲覧・参考係）Makino, Takako: キリスト教に関しては全くの門外漢です。（といて何が専門かといえ、？）が、早くこのプロジェクトに慣れていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

資料寄贈一覧（1996.5.31現在）

「カトリック文庫」充実のため、下記の方々より貴重な資料を寄贈して頂きました。ここに御名前を掲載させて頂き、改めて謝意を表したいと存じます。

【個人】

壺阪国三氏（関市）

大泉計一郎氏（宮城県柴田郡）

【団体】

カトリック仙台司教区本部事務局 渡辺氏（仙台市）

編集後記

カトリック大学連盟図書館協議会総会が目前に迫ってきました。梅雨時の季節、晴れることを願っています。(M.M.)

今後も、資料の収集及び、「カトリック文庫」の充実をはかるべく、他の方々と共に活動をしていきたいと思っております。(Y.O.)

南山大学図書館カトリック文庫通信
カトリコス 第6号 1996.6.1 発行
南山大学図書館「カトリック文庫」プロジェクト
編集委員:三浦 基、尾形裕司
〒466 名古屋市昭和区山里町 18
Tel:052(832)3163 Fax(G3):052(833)6986

(タイトルデザイン:加藤富美)